



序

大学在学中に矯正を学んだことのない臨床医はいないだろう。反面、専門医以外で矯正をルーティーンで行っている一般歯科医(GP:General Practitioner)はきわめて少ない。理由として、以下の2点が考えられる。

まず、矯正臨床自体が、治療を始めてからその結果が出るまでにかかなりの時間がかかること、またそれに対応するスキルの習得に対しても、結果としてある程度時間が必要であることがあげられる。次に、GPの臨床として補綴や歯内療法、歯周治療などは通常の仕事として避けることはありえないが、仮に矯正をまったく行わないGPがいても、それは診療形態としては十分成り立つという側面がある。

筆者は現在矯正専門医として開業しているが、かつては矯正とは無縁な開業医として臨床を行っていた。しかし、一般臨床を行いながら矯正を専門に学ぶ機会を得ることができ、その間自身の治療の幅が大きく広がることを経験できた。具体的には、診断においては骨格系を含めた咬合の診査・診断ができるようになったということと、治療においては歯をある程度動かすことができるようになったため、補綴や歯周病の症例に対してより幅の広いアプローチができるようになったということである。今回その経験を踏まえて、「一般臨床の中でGPがどのように矯正に取り組んでいけばよいのか」という観点から本書を執筆した。

もちろん臨床には個人個人で得意な分野があり、専門医顔負けの矯正を行っているGPも存在するだろう。反面、開業後の長い臨床生活を送る中で、矯正とまったく関わらないことで自らの臨床の幅を狭めてしまっているGPも数多いのかもしれない。では、現実的にGPはどの程度まで矯正に関わって取り組むことが最善の方法なのだろうか。そもそも臨床でいかに矯正に関わるかは臨床医の裁量権の範囲であり、それはまったく自由な世界であるといえる。その前提において、私見だが、成長発育期の全顎矯正(COT:

Comprehensive Orthodontic Treatment) や、それに準ずる歯周治療や補綴との関連性の薄い成人のCOTなどは、専門医に任せる方がよいと思われる。他方、補綴をよりスムーズに行うための補綴前矯正や、歯周病により病的歯牙移動 (PTM: Pathologic Tooth Migration) を生じた状況を改善する矯正などは、感染のコントロール・インプラント・クラウンブリッジと密接に関わる一連の治療の中での矯正となり、同じ矯正とはいえ、専門医にとってはなじみが薄く親和性が低い分野であるといえる。

筆者は、このような領域こそが GP が進んで矯正を行う分野であると考えている。なぜなら、この領域での矯正は比較的難易度が低い反面、矯正を適用することで治療結果の品質向上にそれが大きく貢献することが多いからである。さらに、感染の除去や補綴を行う術者と歯牙移動を行う術者が一致しているということは、患者にとっても術者にとっても一定の利益となりえる。

このような分野の矯正は、全顎矯正 (COT) に対して限局的矯正治療 (LOT: Limited Orthodontic Treatment) となることが多く、筆者はこの LOT こそが GP が臨床で取り組むべき矯正の分野であると確信している。もちろん、専門医と連携しつつ LOT を適用していくことも 1 つの方法であるし、それを実行している GP もいるだろう。しかし、筆者自身の経験則ではあるが、一定の臨床経験をもつ GP が矯正を再び学ぶことは、診断においても治療においても臨床の幅を確実に広げてくれることは間違いないと思われる。

志をもった臨床医のそのようなニーズに応えることが本書の目的であり、筆者の希望とするところである。

2021 年 3 月

藤本研修会講師 加治 初彦

【謝辞】

本書の執筆にあたり、25 年前に一般臨床で矯正をどう生かすかというテーマで講義の場を与えていただいた藤本順平先生 (藤本研修会主宰) に感謝したい。また、研修会でインストラクターを長年務めていただいている栗林系次先生 (東京都開業)、伊藤智美先生 (岐阜県開業)、飯島 実先生 (東京都開業) にもお礼申し上げたい。特に、伊藤先生はタイポドントの項目で大きな貢献をいただいたことに感謝したい。

本書は研修会のテキストをベースにしており、星野 享先生 (東京都開業)、西村真奈美先生 (神奈川県開業) にも大変なご尽力をいただいた。

また本書の出版に際しては、インターアクション株式会社の木村 明様、畑めぐみ社長、株式会社デルタルダイヤモンド社の安斎清幸様、濱野 優社長の大きなご支援があったことを記しておきたい。